

「松尾芭蕉が上越市域に残した足跡」

松尾芭蕉の生い立ちと蕉風の確立

寛永21年(1644)、芭蕉は伊賀国上野(三重県伊賀市)の苗字・帯刀を許された有力農民であった松尾家の二男(幼名金作)として誕生しました。19歳となった寛文2年(1662)から津藩(伊勢・伊賀32万石)の侍大将であった藤堂家(伊賀国上野詰め)に厨房役あるいは料理人として仕えたといわれています。この時から、同家の嗣子主計(蝉吟)と共に京都の北村季吟に師事して俳諧を学びました。寛文6年(1666)に主計が亡くなると芭蕉は、藤堂家を辞しました。しかし、その後も芭蕉は伊賀国上野にとどまり、宗房と名乗って創作を続けました。延宝3年(1675)(諸説あり)、芭蕉は江戸に出て俳諧師となり、桃青と名乗りました。芭蕉と名乗るのは、天和2年(1682)、39歳からで、門人から芭蕉の株を贈られたことに由来するといわれています。

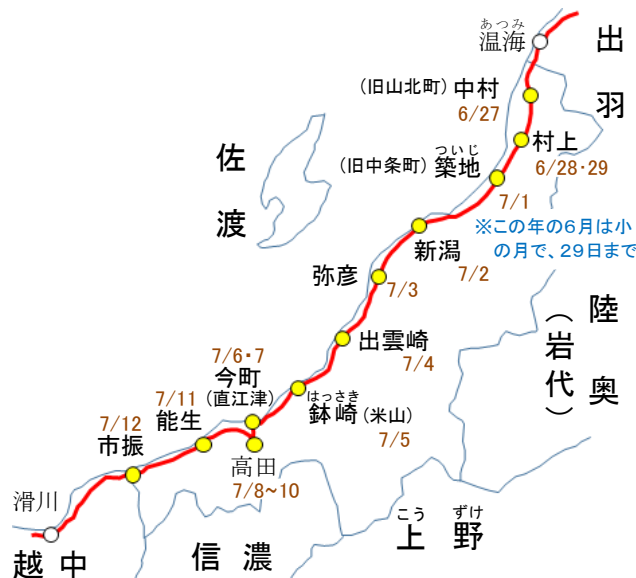
さて、俳諧は、長句(五・七・五)と短句(七・七)を複数の読み手が交互に続けていくもので、当時は「俳諧の連歌」ともいわれたように、元々鎌倉時代に盛んになった「連歌」から派生したものです。連歌では、漢語や俗語(俳言(はいごん)俳言(はいげん))を用いることがタブーとされ、和歌的な情趣が重視されました。一方、俳諧では、俳言が用いられ、機知や滑稽さに主眼が置かれました。芭蕉が登場する以前の江戸時代の俳諧では、当初、縁語(えんご 複数の関連)や掛詞(かけことば 同音異義語)を用い、言葉遊びを主とした貞門風(ていもんふう)が一世を風靡(ふうび)しました。その後、古(いにしえ)の詩歌をモチーフにして俳言で滑稽に言い換える談林風(だんりんふう)が流行しました。芭蕉自身も貞門風及び談林風を経験しています。しかし、老荘思想の影響や幾度かの旅を経て、「さび(古く枯れてしみのある静かな趣)」「しおり(哀憐の情をもって万物を眺めること)」「ほそみ(繊細な感情やこまやかな愛情をもって対象をとらえ、美を見出すこと)」「かるみ(日常の中で新しい美を発見し、平易に表現すること)」を理念とする蕉風(しょうふう)にたどりついたといわれています。

ちなみに、芭蕉は数々の有名な俳句を残しています。しかし、俳句は明治時代に確立された文学であり、江戸時代には、俳諧で最初に詠まれる長句である「発句」と呼ばれていました。

「おくのほそ道」の旅の概要

元禄2年(1689)3月27日(新暦5月15日)、芭蕉(46歳)は、門人の河合曾良(41歳)と江戸の深川を出発しました。東北・越後・北陸を経て、旅の終点である美濃国大垣に着いたのは9月6日(新暦10月18日)でした。約2,400kmの道のりを156日かけての旅でした。元禄2年は芭蕉が敬慕する西行法師の500回忌にあたり、芭蕉がこの旅をはじめ大きなきっかけになったといわれています。また、この旅は歌枕(和歌に詠まれた名所)をめぐることを目的としていました。さらに、各地の俳人たちとの交流により、蕉風が広まるきっかけになったといわれています。

芭蕉と曾良の越後国内の行程



越後国内の行程と主な出来事

芭蕉が記した「おくのほそ道」は、旅から5年後の元禄7年(1694)に完成しました。このことが示すように、同書は、旅での体験を素材にしつつも、芭蕉が新たに創作したものだと考えられています。同書の越後国内の記述は、「**鼠の関を越れば越後の地に歩行を改めて越中の国一ふりの関に至る、此間九日、暑湿の勞に神をなやまし病起りて筆を記さす**」と、鼠ヶ関から市振までは省略されています。

一方、昭和13年(1938)に存在が明らかになった「曾良奥の細道随行日記」には、右に示した旅の内容が記されています。随行日記によると、越後国内各所に、15日間逗留しています。柏崎・今町・高田・名立では、旅で出会った美濃国の商人弥三郎(低耳)の紹介状を頼りに個人宅に泊まる予定でしたが、様々な事情によりすべてご破算になっています。

さて、先述のとおり、芭蕉は「おくのほそ道」に越後では暑さと雨に悩まされ、病を起こしたと記しています。実際、越後滞在は新暦の8月中旬から下旬であったにもかかわらず、日中晴れたのはわずか5日間で、10日間は雨降りであったことが随行日記から確認できます。なお、芭蕉は痔と疝氣(下腹部の痛み)が持病であったことが知られていますが、この持病やその他の病気が発症したかどうかは、随行日記には記されていません。

今町及び高田の俳人たちとの交流

7月6日(新暦8月20日)、鉢崎(柏崎市)の宿を出発した芭蕉は、北国街道を通り黒井まで来ると、ここから「黒井道」と呼ばれた海岸沿いの道を進みました。

そして、関川(今町では「荒川」と呼んだ)の河口(下の渡し/古城~今町)を舟で渡り、今町に到着しました。今町では、宿泊を予定していた中町(3^{中央})の聴信寺に紹介状を届けましたが、忌中であると告げられたため同寺を立ち去り、古川市左衛門方に宿をとりました。——『直江津町史』は、元禄6年(1693)に運上取立役に就任していた古川屋市左衛門だと断定しています。時代は下りますが、幕末に刊行された『東講商人鑑』(あずまこうあきんどかがみ 新潟県立歴史博物館所蔵)中の「越後頸城郡直江津今町湊之図」には新町(2^{中央})に「古川屋」が描かれています。略図であるため位置関係ははっきりとは分かりませんが、聴信寺からす

「奥の細道随行日記」に記された越後国内での天候と主な出来事

旧暦(新暦)	天候	出来事
6月27日(8月12日)	折々小雨す	温海を立ち、鼠ヶ関を越え中村(旧山北町)に宿泊
28日(13日)	朝晴れ。葡萄峠に至り甚だ雨降る	葡萄峠を越え村上の宿屋に宿泊、宿屋に到着後、城中へ(翌日の対面の下見あるいは予約か)
29日(14日)	天気吉(よし)	村上藩筆頭家老榊原帯刀に对面(銭百疋拝領)、帯刀の父良兼の墓参。瀬波へ(神社参拝か)向かった後、再び村上に宿泊
7月1日(15日)	折々小雨振る夜甚だ強雨す	藩主の菩提寺泰叟寺を参詣。村上を出立後、乙宝寺を参詣。築地村(旧中条町)次市郎方に宿泊
2日(16日)	昼時分より晴れ	適当な宿が見つからず、新潟の大工源七方に宿泊
3日(17日)	快晴	馬の運賃が高いため、徒歩で弥彦に向う。宿屋に宿泊。弥彦神社を参詣
4日(18日)	快晴。夜中雨強く降る	寺泊の西生寺で即身仏を拝む。出雲崎の宿屋に宿泊
5日(19日)	朝まで雨降る小雨折々降る	柏崎の天や弥惣兵衛方に紹介状を届けたが宿泊を断られ、鉢崎のたわらや六兵衛方(宿屋)に宿泊
6日(20日)	雨晴れ	関川河口を渡し船で渡り、今町に入る。紹介状を持って聴信寺を訪れたが、忌中のため、古川市左衛門方に宿泊。夜、俳諧
7日(21日)	雨止まず。屋少々のうち雨止む	日中、聴信寺に招かれる。夜、佐藤元仙(右雪)方で俳諧があり、同方に宿泊
8日(22日)	夜中、風雨甚だし。雨止む	石塚喜右衛門(左栗)方に招かれた後、高田に出立。当初、池田六左衛門方に宿泊の予定であったが、招きにより医師細川春庵方に宿泊。夜、俳諧
9日(23日)	折々小雨す	俳諧。細川春庵方に宿泊
10日(24日)	折々小雨。夕方より晴れ、暑さ甚だし	中桐基四郎方で俳諧。夕方、細川春庵方へ帰り宿泊
11日(25日)	快晴	高田を立ち、五智国分寺と居多神社を参詣。名立の宿泊予定先に案内状が届いていなかったため、名立を通り過ぎ、能生の玉や五郎兵衛方(宿屋)に宿泊
12日(26日)	快晴	早川で芭蕉がつまずき衣類を濡らしたため、川原で干す。糸魚川宿新屋町の左五左衛門方で休憩した後、親不知を抜け、市振に宿泊

ぐ近くに描かれており、芭蕉が泊ったのは、この古川屋であった可能性が高いといえます。——同夜、古川方では俳諧が開かれました。曾良が記した『奥の細道俳諧書留』によると、石塚喜右衛門(左栗)・石塚善四郎(此竹)・石塚源助(布囊)・眠鷗(住職)などの今町の俳人が訪れています。この時、芭蕉は発句で「**文月や六日も常の夜には似ず**」(今日は七夕の前夜であり、いづれとも異なる雰囲気がある)と詠んでいます。

7日は、日中に聴信寺へ招かれました。夜は佐藤元仙(右雪)方で俳諧が開かれ、芭蕉は同所に泊まりました。宿を提供した佐藤元仙がどのような人物であったのかは不明ですが、『直江津町史』は、今町の庄屋を務めていた佐藤佐治右衛門(住所不明)ではないかと推定しています。

8日は、左栗方へ招かれた後、今町を立ち、高田に向いました。今町の俳人から連絡がもたらされたものか、高田では医師の細川春庵から迎えが出されました。しかし、芭蕉たちは、まず宿泊を予定していた池田六左衛門方(職業・住所等不明)を訪問しました。あいにく先客があったようで近くの寺で待っていたところに、春庵から誘いの手紙が届いたため、春庵方に泊まることになりました。同夜、鈴木与兵衛(更也)が春庵方を訪れ、俳諧が開かれました。この時、芭蕉は発句で「**薬欄にいつれの花をくさ枕**」(たくさんの薬草が咲いている。今夜はどの花の傍らで寝たらよいものか)と詠んでいます。——曾良が随行日記に「細川春庵」と記した人物について、大正3年(1914)発行の『(旧版)高田市史』では、高田大工町に住んでいた細川昌庵(升庵又は青庵とも、俳号は棟雪)だとしています。一方、町年寄を務めた森家が記した「高田火災記」には、延宝4年(1676)3月29日に発生した大火災にかかわり、「**寄町細川升庵**」という記載があります。当時、高田には「本大工町(仲町4)」と「寄大工町(仲町6)」の2つの大工町があり、寄大工町の通称が寄町でした。したがって、芭蕉が宿泊した春庵の邸宅は、寄大工町にあったと考えるのが妥当です(これまで、春庵の邸宅が本大工町(仲町4)にあったと誤って解釈されることが多かった)。——

9日は、時刻ははっきりしませんが、俳諧が開かれています(どのような人物が参加し、どのような句が詠まれたのかは、記録に残されていない)。芭蕉は、この日も春庵方に泊まりました。

10日は、日中に中桐甚四郎方で俳諧が開かれましたが(詳細不明)、夜には春庵方に戻りました。

11日は、高田を出発した後、五智国分寺と居多神社を参拝しました。その後、名立での宿泊を予定していましたが(宿泊予定地不明)、紹介状が届いていなかったようで、名立を通り過ぎ、能生の玉屋五郎兵衛方に泊まりました。

以上が、芭蕉と曾良の上越市域での旅の概要です。当初予定していた場所に宿泊することは叶いませんでしたが、今町でも高田でも、芭蕉一行が歓待されていることがうかがえます。また、越後の他の訪問地とは異なり、今町と高田では連日俳諧が開かれているのも、特徴的です。これは、今町と高田に俳諧をたしなむ町人文化が根付いていたことを示しています。

合併前の上越市域に立つ芭蕉の句碑

合併前の上越市域では、五智国分寺(五智、ことひら、3)、琴平神社(中央、ほんきょうじ、大字、黒井、3)、本敬寺(大字、黒井、3)、対米館(大貫、しょうりんじ、南本、2)、正輪寺(町3)、北城神明宮(北城、町1)の地内に芭蕉の句碑が残されています。さて、平成元年(1989)は、芭蕉と曾良が「おくのほそ道」の旅に出てから300年目という節目の年でした。上越市は「松尾芭蕉奥の細道紀行300年記念事業」として、上記の芭蕉の句碑の傍らに解説板を設置しました。それぞれの句碑のいわれについては、「広報じょうえつ」等でも詳しく紹介されています(資料5参照)。

薬欄にいつれの花をくさ枕



対米館庭内の芭蕉句碑